

叙事詩ポプラの丘・懿徳頌述第一

泰煌藝文類聚

野尻泰煌

の
上
の
丘



Copyright
2013 NOJIRI taiko.
All rights reserved.
DTP by YATAIKI.
Photographed by BION.
Printed in Japan.
題字・枠／野尻泰煌



叙事诗ポプラの丘・懿徳頌述第一

泰煌藝文類聚



目次

「ポプラの丘」小冊子に寄せて	・	・	・	・	・	・	5
野尻泰煌 収蔵作品	・	・	・	・	・	・	6
叙事詩ポプラの丘・懿徳頌述第一							
木見吞の大壺へ漢詩へ	・	・	・	・	・	・	9
木見吞の大壺へ現代文へ	・	・	・	・	・	・	69
藝文類聚へギャラリーへ	・	・	・	・	・	・	84
寄稿文							
へポプラの丘へという手紙 著・松里鳳煌	・	・	・	・	・	・	121
五反野教室 著・刀根隼一	・	・	・	・	・	・	124
奥付	・	・	・	・	・	・	125

「ポプラの丘」小冊子に寄せて

民族・風土・環境・言語・歴史・民族的傳統感覺や生活様式に及ぶ「種」的要素に規定される概念を踏まえ、アイデンティティーの必要性の見直し、普遍妥当性の背景を基調に沿革とする活動。

自國の文化周邊の「種」の美意識の究明。植民地支配で生じる歴史的な文化變遷と異文化の相似性の考察、「類」的共通の美意識全般の内容に到る。

さらに、ユング心理學の實踐を通し、「種」の美意識を超え「類的共同性」に目覺めることに主眼を置く、総合藝術を素材に一連の系統を統御する課題は、近年 海外へ向けての實驗的營みに反映されてくる。

さてこの度、妻・君江十三回忌を一つの節目にこれらを象徴する「ポプラの丘」を小冊子にまとめ、彼女の利生に感謝し共通の人間性に到達することを悲願にこれを以って妻に手向ける次第である。

野尻 泰煌

中華人民共和國·青島市國立博物館·二〇一一年收藏



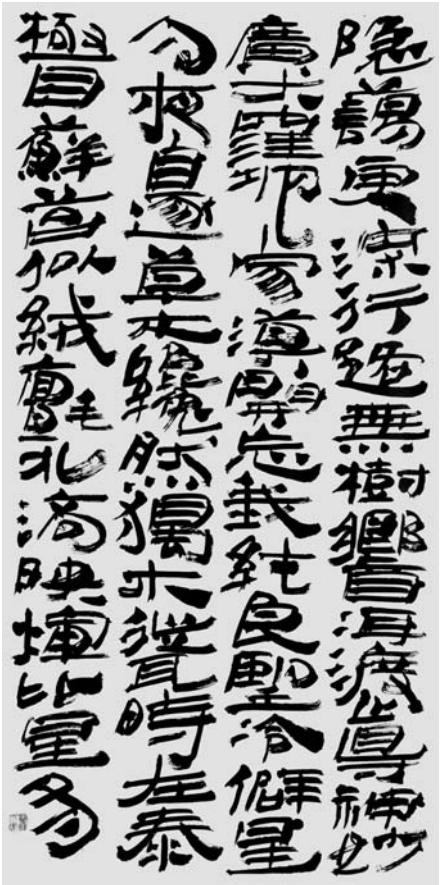
是(刻字)·二〇〇七年

蘇苔映星月夜（書）・二〇一二年作


隱謁更添造無樹響海渡尊神妙庵去聖却寥漢
閑忘我純及聖冷僻星兮來邊草不纔然獨不
贊時在恭極目蘇齒似絨塵北清映揮比星為

ハンガリー・ホップ・フェレントス東洋美術館・二〇一三年收藏

蘇苔映星月夜（書）・二〇一一年作



フランス・パリ・ベルシー美術館・二〇一三年収蔵



叙事詩ポプラの丘・懿徳頌述第一
木見吞の大壺へ漢詩へ



一·序·永世吞瞬息

聳古木刻悠久時

龍鱗大壺坐樹顛

戰亂軍兵野營在

騎卒巡邏日傾西

吞息仰屹立異木

猛甲胄音入窠中

森隱闇馬寂寄體

竟勇士再不歸旋

(原文)



一・序・永世は瞬息を呑む

聳える古木 悠久の時を刻み、

龍鱗の大壺 樹顛に坐す。

戦亂にして軍兵の野營在り。

騎卒は巡邏し 日は西に傾く。


息を呑み 屹立異木を仰ぐ。

猛き甲冑の音 歎の中に入る。

森は闇に隠れ、馬は寂にして體を寄せる。

竟に 勇士再び歸旋にあらず。

(訓讀)



一、聳える古木は永い時を計過し、
龍の鱗のような大壺が木の頂きに坐していた。

二、戦争がはじまり軍隊の野外の陣營があり、
騎兵は付近を見回り調べ、日は西に落ちている。

三、壓倒され聳え立つ珍しい木を見上げ、
荒々しい甲冑の音をたてて、窠の中へと入っていった。

四、森は闇に包まれ、馬はひっそりとして體を寄せあっていた。
竟に 勇士達は再び歸ることがなかった。

(國語譯)



一・聳古木刻悠久時 龍鱗大壺坐樹顛

變遷する人間史を背景に時を越え尚生き續ける古木に寄せて悠久不變を表示した内容。

「龍鱗」とは、「王維詩」の一節の語で松の幹に喩える意。

この詩では、古木が永い時を得て壺状に變形した木肌に龍の鱗を想定している。恰も樹の頂きに大壺が重々しく坐している光景として書かれている。

二・戰亂軍兵野營在 騎卒巡邏日傾西

人の儂い無常を意味する戰亂という時代を設定している。

兵達の野營という物々しい状況を背景に見回す騎兵達の様子に加え、夕暮れ時の温度差と静けさの自然描寫を交えて時の計過を示している。

三・呑息仰屹立異木 猛甲冑音入窾中

悠久の時を象徴する古木の前で人の儂い瞬時の有様を表している。

騎兵達が馬を降りて聳える珍しい木を見上げ壓倒されている光景である。

「異木」は、あやしい木というよりは優れている意味として理解したい。「漢書」の一節に「異人」の語があるように、優れた人や奇特の士などに「異人」を用いる。神人や仙人の類などの不思議な人の意味同様、「異木」も不思議な木として理解できるだろう。

大壺の中へと好奇心に引かれる兵達が荒々しい甲冑の音をたてて木に臨む光景は、より邊の静けさを深くしているといえる。

この詩の「永世は瞬息を呑む」という題目がこの一節で理解できる。つまり、木は悠久の時を刻む中で根を着実に張って命を長らぐが、人は目先の計いを知るあまり一抹の儂い思いに斃れることへの嬌羞をこの詩が暗示している。

四・森隠闇馬寂寄體 竟勇士再不歸旋

人が壺に呑まれ人の存在も氣配も跡形もない状況、さらに、闇と静寂の中で馬だけがひっそりと體を寄せ合う光景に一層の無常感を表示している。

眞の均衡とは寄つて來たるもの。

時を通過して

残り得たものが

人にとつての生きる

よすがになる。

(ポプラの丘語録より)

